『完本丸山健二全集』刊行記念インタビュー①

文学界の巨匠が自由自在に己を語り、作品を語る――

本当のすごい文学は、一行も書けないところから始まる。

なぜ、作家になったのか

柏艪舎代表 山本光伸（以下「代」） 今回は対談などという難しいことではなく、あくまでも先生の思うところを一方的に語っていただきたい、ということです。僕の役割は〝引き出し役〟ですね。つまらないことをお訊きするかもしれませんが、その点はご容赦を。それではまず、作家という職業について――。

丸山健二（以下「丸」） 実はこの五十年間、皆さんが思っているほど、好き好んでこの世界に身を置いてきたわけじゃないんです。この世界に入ったとたんにすぐに違和感を覚えたんです。文学が好きでこの世界に入ってきたわけではなくて、会社が潰れそうになったから、なんか仕事をしなきゃいけないということで、それだけなんです。

元手が一番かからない仕事は何かと考えたら、小説が一番楽だなということ。映画が大好きだったもんですから、映画関係の仕事に昔憧れたことがあって、でもなかなかそう簡単に入れる世界じゃない。あの世界は徒弟制ですし、みんなと一緒にやるのも嫌だなと思って。小説は紙と鉛筆さえあればいいなと。

私は単なる映画ファンではなく、映画のストーリーの運び方とか、手法の面も非常に研究していたんです。作る側、監督の側に立って映画を観る癖がついていて、いい映画だと五、六回観るんです。どうやって作るんだろう、と考えながら。それがいざ自分で小説を書く時に非常に役に立った。

日本映画と外国映画の決定的な違いというのは、日本映画は説明的なセリフがものすごく多い。説明的なカットもものすごく多い。予算の関係があるからなんです。やたら、顔のアップばかりで。安く済むんですよ、あれ。

代 なるほど。テレビでよく見る某外国ドラマなんか顔のアップばかりですね。

丸 黒澤明ですら、セリフが多すぎる。余計な説明ばかりしている。言いまわしがわかりにくくて、観る者に伝わらない。それで、ごまかすんです。

これは、出版界もそうなんです。日本の出版界も「わかりづらい」「読みづらい」、「伝わりづらい」。この決め台詞でもって、バカにものを言うような書き方をして、せっかくのレベルをぐんと下げてしまう。

代 確かに、説明で全部言い切らなきゃだめ、みたいなところがありますね。

丸 そうです。「説明的な会話」、「安直な地の文」、これだけで小説を成り立たせてしまうんです。

デビュー当時に見た出版界の裏側

丸 日本のいわゆる明治以降の近代文学の連中が書いたものというのは、本当にアホにものを言うような書き方をしているわけです。くどくて、説明的で、それでみんな満足していた。当時はテレビもラジオもない時代ですから、一種の娯楽としての文学だった。

それから、印刷の技術が発達して、普通の人たちがみんな読めるようになった。そうすると、出版会社がこれは儲かるぞということで、易きに流れる方向へ日本百科事典）とか。

代 ええ。うちにもありました。

丸 そういうものを、ずらっと並べるために買った。活字に対する信奉というか、文学が読めるんだと主張したかったんでしょう。本当に読んでいたかどうかは疑問ですけど、そういうものに対して憧れを持っていた時代があった。

そのうちに、本音の時代に入ってきて、「かっこつけてもしょうがない」という風潮になったところに、今度は映像の時代がスパンと入ってきた。そうしたら、映像の方が視覚に強烈ですからね、活字なんていちいち面倒くさくて読んでいられない。それで映像の方にどーんと流れていって、出版社の方はどんどん衰退していった。

さっきも言ったように、私がこの世界に入った五十年前はまだ、いくらでも儲かる時代でした。大手出版社社長の就任披露があった時には、大きなホテルの広間を借り切って、全員に土産を持たせて、二次会、三次会と朝まで飲み明かすというような。

代 へえ。バブルですね。

丸 そうそう。俺はそういうの嫌いだから「出たくない」って言ったら、当時は二十二歳のガキだから、社長に「いやいや、丸山君、私が就任したときの芥川賞作家だから来てもらわなきゃ困る」って言われて、無理矢理編集者に連れて行かれたんですよ。

それで行ったら本当にすごい。これは、文学という雰囲気じゃないなと思った。二次会にも来てくれって言われて、「それはもう勘弁してくれ」って断ったんだけど、絶対、来てくれって。しょうがないから遅れて行ったんです。

そしたら、銀座の超一流のところで、一回座れば一人十万円というような有名クラブだった。そこに行ったらその新しい社長が、どーんと真ん中に座っていて、作家や評論家を周りにはべらせている。それで、「丸山君、いいだろうこういう雰囲気」って。「どこがいいんだ、バカたれ」って思ってた。

当時、若くして作家になる連中の多くが学生からなっていたんです。ところが俺は商社にいましたからね。俺が大人の世界にいたってこと、あいつら頭にないんです。俺はとぼけて、様子を窺っているところがあって。「ああ、こんな世界なんだな」と冷ややかに見ていたけど、口には出さなかった。だから、向こうはガキ扱いしてきたの。

その世界を見て、俺はもう縁を切ってやろうと思った。この文学の世界はくっだらねえなって本当に思った。こんなやつらがやってるんだったら、やめておこうって。

それより何より、『夏の流れ』で芥川賞をとったときに、強烈な違和感を持ったんです。あんな、二十歳そこそこのガキが書いたものが、芥川賞なんて。俺、それまで芥川賞のことも知らなかったの。純文学に興味もなかったし。「そんなレベルなの?」って思った。俺はあれで満足していたわけじゃないんです。ただ、ちょこちょこっと会社の時間を盗んで、会社の紙と、会社のボールペンで書いた小説ですから、賞を取ったときは非常に驚いた。

みんなが言うには、「二十二、三のガキにしては老成してる」って言うんです。「老成」っていう言葉を使うんです、平気で。どういう意味なんだと思った。だけど選考委員の小説を読んだときに初めてわかったんです。四十、五十といい歳した男がね、こんなガキみたいなことを書いているんなら、俺のことを老成していると言っても不思議ではないなと思った。だからますます嫌気がさして、やめるっていうことになったんです。

代 え?! やめる、と?

丸 ええ、もうはっきり、担当の編集者に「やめて田舎に引っこむ」って言ったら、百枚の一作品（『夏の流れ』）だけでは、いくら行をあけても本にならない。最低でもあと二作書いてくれ。ぎりぎりの厚さでいいから本にして、やめるならそれからやめてくれと言われて。それで、しぶしぶ二作書いたんです。

そしたら、これが玄人受けしましてね。短編の名手とか、短編の神様とかそういう人たちから評判になった。これはすごいとなって「人生を知っているのは丸山だけだ」って、三回にわたって新聞に書かれたんです。

代 それは面白いですね。

丸 そしたら、今まで「あんな、丸山なんか、まぐれでなっただけだ」と思っていた編集者が急にコロっと態度を変えた。それで、寄って来て、長編を書いてくれってことになって『正午なり』を書いたんです。そしたら、それがまた売れやしないんだけど、玄人受けしましてね。そのままずるずるっとこの世界に……。

代 我々にとっては、願ってもないことでしたが。

作家生活、五十年間のモヤモヤ

丸 いや、ところがね。好き好んでやってたわけじゃないんです、本当に、この五十年間。モヤモヤーっとしたものが――。

代 そうおっしゃっていますよね。そこがよく僕にはわからなかったんですけど。

丸 そのモヤモヤは、日本

丸山健二先生（右）と柏艪舎代表 山本光伸。
丸山先生のご自宅の庭で撮影。（2017年10月）